刈谷城築城４８０年記念事業

平成２５年度 刈谷城跡発掘調査 現地説明会

刈谷市教育委員会　文化振興課

平成２５年１２月７日（土）午前１０時～　於：亀城公園内

１　刈谷城について

刈谷城は、天文２年（１５３３）に水野忠政が金ケ小路のほとりに築城したのが起こりで、江戸時代になって水野勝成を初代藩主として９家２２人の藩主によって刈谷藩が治められました。

明治４年の廃藩置県後、刈谷城は政府の所有となり、城郭建築は入札によって払い下げが行われ取り壊されました。その後は大正２年に大野介蔵に売却され保存されたことを経て、昭和１１年に刈谷町に売り渡され、翌年には亀城公園となりました。

江戸時代中期までの城絵図では、本丸の北西と南東の隅には２層の櫓があり、辰巳櫓（南東隅櫓）の両側には多門櫓が石垣とともに延びて表門・裏門へと続いていることが確認できます（図１）。

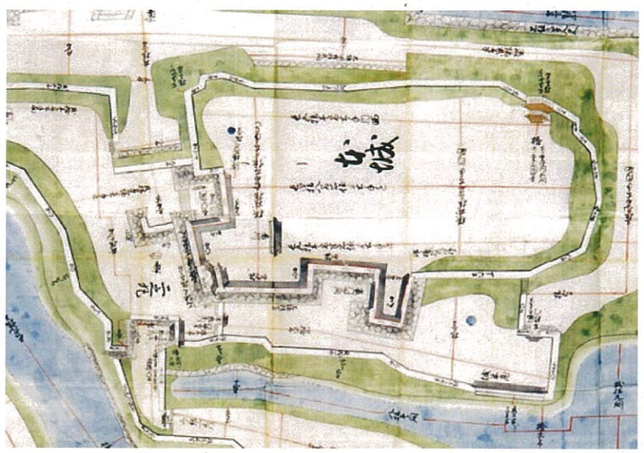

図１　刈谷城絵図（本丸部分　江戸中期）

２　調査の経緯

刈谷城跡の発掘調査は亀城公園再整備事業にともない平成２１年度から実施しており、今年度は第４次の調査になります。調査区は本丸東側の多門櫓があった辺りで、１０月２１日から現地調査を開始しました。調査面積は約２００㎡です。

３　調査の目的

調査の目的は、辰巳櫓から裏門に続く多門櫓の配置を確認することです。石垣そのものは残っていないため、石垣を築く際に地面を溝状に掘り、中に拳大の石を多量に入れて地盤を強化した「地固め」の痕跡を見つけることを中心に調査を進めました。また、多門櫓に付随すると思われる遺構や瓦だまり等の廃棄遺構についても調査しました。

４　これまでの調査成果

（１）多門櫓

辰巳櫓から裏門に至る多門櫓の櫓台石垣を築くための地固めの一部が見つかっています（図２、４）。本丸面で櫓台の内側の石垣の地固め、帯郭面で外側の石垣の地固めが見つかり、それらが南西－北東方向に並行して直線的に延び、外側の石垣の地固めについては裏門手前でクランク状に折れ曲がる状況が確認されました。また、表門から西へ続く多門櫓の櫓台の内側の石垣の地固めおよび裏門から北東へ続く多門櫓の櫓台の外側の石垣の地固めの一部も見つかり、前者の北側には雨落ち溝か水路と思われる石組み溝が見つかりました。

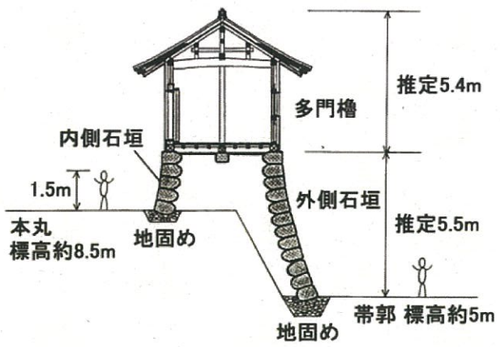

図２　多門櫓と石垣の断面模式図

（２）表門

表門に伴うと思われる礎石跡と雨落ち溝が見つかっています。礎石跡は西側の２基と東側の４基が並列し、雨落ち溝もそのすぐ東側に並行していました。

（３）裏門

裏門に伴うと思われる礎石跡と、帯郭から裏門へ登る坂道が見つかっています。坂道は裏門の手前で平場となり、裏門との境界にあたる場所には石段の跡と思われる地固めが見つかりました。

（４）辰巳櫓

本丸面において、裏門から続く多門櫓の櫓台石垣の地固めが西へ向きを変える状況が確認されています。

５　今年度の調査成果

（１）辰巳櫓から裏門に続く多門櫓の配置について

裏門の南側でクランク状に折れ曲がる櫓台の外側の石垣の地固めに対応する内側の石垣の地固めが、本丸面においても同様にクランク状に折れ曲がる状況が確認され、これまで部分的だった櫓台の内側の石垣の地固めが、裏門から辰巳櫓にかけてほぼつながりました（図４　地固め２）。並行する外側の石垣の地固めとの間隔（中心間の距離）は約４．５ｍ～６ｍで、この差は内側と外側の石垣基底部の比高差によるものと思われます。地固め２の幅は約１．５ｍ、深さは約１ｍで、土の中には多量の拳大の丸石と少量の瓦が含まれていました。

（２）多門櫓に付随する可能性のある遺構について

直線的に延びる地固めが、部分的に本丸内側に向かって張り出す場所が３か所見つかりました。

地固め７は、ちょうど地固め２が辰巳櫓に向かって折れ曲がる所にあたり、周囲よりやや高くなっていたようです。地固めの南西部からは縁石の可能性のある板石列の一部が見つかりました。この板石列は、雨落ち溝や石組みの水路である可能性もあります。

地固め４は、地固め７から南西２．５ｍの所で見つかりました。東西約１．５ｍ、南北約２ｍの長方形で、地固め２とは直交する平面形です。多門櫓に入るための石段に伴う地固めか、あるいは平成２２年度にすぐ南西側で見つかった大甕に関連する施設の可能性があります。

地固め６は、調査区の南西部で見つかりました。東西約３．９ｍ、南北約２．４ｍの長方形で、外縁に人頭大の角石が並び、地固め２付近には大きな礎石が東西２か所に対をなして見つかりました。拳大の丸石は全面ではなく、外縁から一定の幅で入れられていました。礎石があることから、柱を伴う建物が想定されますが、一定の幅をもつ地固めからは、石垣あるいは石段等の石積みの建造物も想定することができます。

また、地固め６の南西に接して、東西約２．５ｍ、南北約１．８ｍの方形の遺構が見つかりました。埋土の上層に玉砂利が含まれることが特徴的で、石垣裾部の表土を化粧していた可能性があります。

いずれの地固めも拳大の丸石を多く含みますが、掘り方は全て約２０ｃｍ以内と比較的浅いものであることから、多門櫓及び櫓台石垣のように重量のかかる施設に伴うものではなかったと想定されます。

（３）その他の遺構について

地固め２から離れた場所で単独に存在する地固めも見つかりました。

地固め１は調査区の北端部で見つかりましたが、ごく一部であるため詳細は不明です。

地固め３は一辺約１．７ｍの正方形で、地固め２から想定される多門櫓とは軸の方向を異にしています（西へ約４５度）。

地固め５は地固め６のすぐ北東側で見つかりました。他の地固めが方形であるのに対し、直径約７０ｃｍの円形を呈します。

瓦だまり（瓦の廃棄土坑）が地固め３に重なって見つかりました。一部は調査区の外になりますが、地固め４の北側から地固め３の西側まで、５ｍ近くある大きな楕円形の土坑内に大量の瓦が廃棄されていました。瓦の時期はほぼ江戸時代前期のもので、中には「立ち沢瀉紋」がついた軒丸瓦もありました（図３）。ある時期に江戸時代前期に葺いた瓦を葺き替えたことがわかります。あるいは瓦の葺き替えだけでなく、建物や石垣を含む改修があったのかもしれません。この瓦だまりが埋められてから地固め３がつくられていることから、地固め３は最初からあったものではなく、ある時期に追加されたものであり、それが多門櫓の方向と軸が異なることと関係しているのかもしれません。

その他に、ピット（小穴）群や単独の礎石跡が見つかりました。それぞれ配置がはっきりしないので特定の建物等を想定することはできませんが、ピット群は石垣や多門櫓を築く際の足場の遺構である可能性があります。

図３　出土瓦拓影

１　軒丸瓦（立ち沢瀉紋）　２　軒丸瓦（八本柄杓水車紋）　３　軒丸瓦（三つ巴紋）　４　軒平瓦（唐草紋）

※１・３・４は瓦だまりから出土。　２は調査区北側の公園造成土内から出土。

図4　発掘調査で見つかった遺構（太枠：今年度調査区）